

# 国語科教育法概説

溝 口 繁 美

## The Outline of Japanese Language Education

Shigeyoshi MIZOGUCHI

### 要 旨

グローバル化が進み多様化する社会の中で、他者と正しくコミュニケーションを行い、自身と他者との生活をより豊かなものにする力を付けさせる国語教育を行おうとすれば、やはり、従来の国語教育の枠を超えることが必要となる。まず、聞くことにおいては、その見える化を進めるために、レポートの作成を重視しよう。聞き取りやディベートの中で、相手の言ったことを的確に書き留める技術も教えた。

読むことについては、個々の読みの多様性の確保が大切である。たとえ評論であっても、解が一つに固定できるとは限らない。また、読みの集団化という観点で、暗唱、群読といった指導の再評価も必要である。

書くことについては、やはり授業の中でもたっぷり時間を取って書かせてやりたい。また、教師の労力が大変ではあるが、添削指導も欠くことが出来ない。話すことについては、グループ討議を習慣化させることやディベートの実践が大事であろう。特に、異なる世界、世代の人と話をする機会を積極的に作る努力が必要である。そのためには、他教科や学年等との連携が欠かせない。

指導における今日最大の課題は、生徒の意欲をどう引き出すかである。国語が世界の多様な言語の中の一つであるという意識と、ユニバーサルデザインの考え方も入れながら、不断の研修とお互いの情報交換の中で実践を繰り返し、有効な教材や方法を見出したい。

**キーワード：**コミュニケーションツール、モチベーション、ユニバーサルデザイン、ディベート、群読、教えることは学ぶこと

## はじめに

日本人であれば、日本語を話すのは当たり前と考えるのが普通であろうが、では、その当たり前の国語をなぜ学校で12年間も教えるのか。また、昨今は社会の国際化が進み、在日外国人が増える中、高等学校に進学はしてきているが、日本語の運用能力にかなり課題のある生徒も増加している<sup>1)</sup>。いま、日本語の運用能力と言ったが、彼らにとっては、日本語はあくまでもコミュニケーションツールとしての言語の一つであって、国語では決してない。さらに、国語として身につけているはずの日本人生徒たちの間でも、国語力と言っていい言語能力を彼らが持っているのかという問題もある。果たして、日本語は彼らにとって本当に国語なのか。

## 0 なぜ国語を教えるのか

我々が外国に行って、体調を崩した時にまず困るのは、言葉である。元気な時にどこかへ行ったり買い物をしたりする分には、言葉が通じなくても、身振り手振りで事を済ませることは出来る。ところが、体調が悪い時に、自分としてはどんな気分や状況で、何処が痛くてどうして欲しいのかが伝えられなければ、ひどい場合には生死にかかわる。だから、たとえ片言であっても、現地の言葉を知っているということは、大変重要なことなのである。

ところが、小中高校という学校段階に進んでくる子供たちは、通常、そうしたレベルははるかに超えて、日常会話や意思伝達に不自由を感じていない。社会に出て普通の生活を維持できるとすれば、言葉の機能としては足りていることになる。では、なぜ学校で国語の授業をするのか。何を子供たちに教えるのか。

そこで問題になるのは、普通の生活ということである。食べて寝て動くということが普通の生活で、それ以上何も必要がないのであれば、国語の授業は必要ないであろう。海外でも行って帰って来るだけ、必要な商品を売るだけでよいのであれば、通常の日常会話のレベルの語学を習得すればよいであろう。しかし、おそらく多くの人がそれだけが生活ではないし、もっと豊かな生活がしたいと思うだろう。そして、その豊かな生活とは、人と楽しく談笑をし、未知

の知見や経験も得、色々な物事との出会いの中で、自分の中からこみあげてくるものを、人に伝えて分かり合えるような、そんな生活のことを言うのではないだろうか。

まず、通じるということだが、普通に人と話をし、外に出かけたり、ものを購入したりすることに不自由がないとしても、そこで使っている言葉が正しいのか、また掲示物等に書かれていることを正確に理解しているかどうかは分からない。その真偽を判断する尺度がなければ、分からないからである。「全くすごい」は、間違っていると言っても、今日多くの人はずいぶん聞き返すだろうし、「馬鹿」も「阿呆」も同じような意味でどちらが正しく、どちらが間違いというものではないが、「阿保」ではなくて「馬鹿」と言われて傷つく関西人はまだ多い。

さらに、「そんなら今一つお前に聞かすが、身代わりをお聞届けになると、お前達はすぐに殺されるぞよ。父の顔をみることは出来ぬが、それでも好いか。」「よろしくございます」と、同じような、冷やかな調子で答へたが、少し間を置いて、何か心に浮かんだらしく、「お上の事には間違いはございますまいから」<sup>2)</sup>と言ひ足した、いちの言葉の意味など分からなくても良いし、奉行やお白洲と聞いて分からなくても生活上困ることは何もない訳だが、当時の世界を思い描き、生死を掛けた人間の毅然とした生き様や言葉の重みを理解することは、我々自身の生き方を振り返らせ、ここぞという時の一句の重み、力に思いを至らせることになる。そのことによって、何気なく流れている日常をもう一度考え直し、言葉の意味と重み、生活の大切さを感じることが出来るのである。

なぜ国語を教えるのか。答えは多様で簡単ではないが、あっさり言ってしまうと、他人とのコミュニケーションを正しく行い、自身と他人との生活をより豊かなものにする力を付けるためと言えるだろう。そういう観点で、以下4つの国語科の教育活動の領域について、授業を実施するにおいて、重要だと思われる事柄について、その概略を述べてみたい。

## 1 聞く

言語の獲得は、まず聞くことから始まる。赤ん坊は周りにあふれる言葉の海にどっぷりつかう中で、その音を聞き分け、それをまねる中で言語を獲得し、それを使うことが出来るようになっていくのだ。しかし、学校教育の中では、聞く機会があまりない。そんなことはない、授業の大半、生徒は聞くだけじゃないですかという声が聞こえて来そうだが、形としてはそうなっているが、授業の中身を振り返って考える時、本当に生徒はその授業を聞いているだろうか。少なくとも、生徒が正しく授業の内容を聞いているという保証はどこにあるのか。

まあ、居眠りしている生徒は論外としても、きちんとこちらを向いて授業を聞いている生徒の何割が、正しくその内容を理解しているだろうか。我々授業者は、そのことをきちんと点検確認する手立てを持たなければならない。

その方策の一つは、毎時間は無理だとしても、聞き取った授業内容をレポートとして提出させることである。板書以外に授業で話した内容も含めて、聞き取ったことを文字にして書かせてみると、いかに授業者の思いが生徒に遠く、伝わっていないかが分かるだろう。そしてこのことは、教師としての思い込みがいかに益のないことかを思い知らせてくれると同時に、生徒の聞き取りの力をチェックし指導の方法を考えるきっかけとなるだろう。外部講師を招いた講演会等でも、簡単なまとめを書く習慣をつけることも一法である。

また、きわめて実践的な方法としては、ディベート<sup>3)</sup>が挙げられる。これは、読み書き話し聞くという、国語で養成すべき全ての力にかかわって効果のある優れた方法であるが、とりわけ、相手の言うことをきちんと聞き、理解しなければ成り立たないやり取りであるから、聞くという能力の向上にはうってつけの方法と言えよう。聞いたことをまとめてレポートというのと、聞くこと自体に嫌気がさすきらいがあるが、ディベートにおいては、聞くことがまず全ての始まりという所があるので、聞き手のモチベーションを高め、維持するという点で、非常に効果的である。

さらに、社会科の授業などではよくやられるが、地域の人達にその土地に伝

わる伝承や昔話等を聞き、それをまとめるという実践もある。これは相手の話を真面目かつ真剣に聞くとともに、それをどうまとめるかということ意識しつつ聞かなければならないので、聞く作業としてはかなり高度なものになるが、今まであまり話をしたことのない地域の人達から、自分たちの住む地域に存在する独特の文化や考え方生き方を、率直な語り口を通して直接聞くという意味で、単に話を聞くというにとどまらない、人間的な触れ合いのチャンスとしても意味があるといえよう。

我々の子供時代には、テレビもなくようやく真空管ラジオが普及していたという、現代の子供たちには想像もつかない時代であったが、逆に最近の若者は、ラジオの存在自体を知らない者が多くなっている現状である。テレビでも聞いているじゃないかという風に言われるかも知れないが、映像と同時に流れる音声を聞くのと、映像がなく音声だけに耳を傾け聞くのとでは、その意味合いは大きく異なる。そういう意味で、教師自らが研鑽を積んで、生徒に読み聞かせるのも良いが、やはりプロの読み手が読んだ朗読を積極的に活用し、生徒たちに聞かせることを勧めたい。

聞くことの指導は、なかなかその結果を可視化するのが難しいが、相手の言うことをしっかり聞き、理解することは、人間同士のコミュニケーションのうちでも最重要といっても良い程の課題であるので、授業の中でも様々な機会をとらえて指導することが重要である。学年集会や全校集会での講話や講演などで、良質なものの充実した内容の話を聞く機会を多く設け、生徒の聞くことの経験を豊かなものにする必要がある。

## 2 読む

国語の授業の中では、一般的にこの読むことの指導の比重が重きをなしている。ただ、まず読み方の大半が、黙読に終始していることはどうだろうか。小学生あたりであると、一斉音読の様子も垣間見られるが、高校生レベルになると、一人の生徒が代表して読みを行うことはあっても、全員で音読という風景を見ることはまずない。



しかし、昔から読書百遍意おのずから通ずと言われるように、何度も何度も繰り返し読むことによって、文章の意味が分かって来るものである。しかも、その方法は素読と言われる、音読の方法である。現代は、社会の変化が激しく、悠長に時間を使うわけにいかないのだが、これという作品については、徹底した音読を行っても良いのではないか。

そういう意味では、暗唱も一つの方法である。正月に百人一首大会などを行っている学校もあろうが、ああいう場面では、生徒たちはこぞって和歌の暗唱に没頭する。詩歌の授業、古文漢文の中の名文、文学作品の冒頭など、教師の個性に従って、これというものについては、積極的に暗唱に取り組ませることが必要ではないか。覚えていて何の役にということもあるが、語句のリズム、場面の映像が、言葉と共に体に滲み込み焼き付けられ保持されることは、それを持つ者にとっては、一種の財産である。

最近、実践場面ではあまり見られなくなったが、群読<sup>4)</sup>も効果的な方法である。一人作品世界に浸ることも大切なことであるが、人と何かを一緒にやるという一体感を味わうことも教育の現場では大切なことである。音楽の授業で、それぞれのパートに分かれて合唱することは、生徒にとって大きな喜び楽しみであり、クラス対抗の合唱コンクールを実施した際の、彼らの真剣な取り組みを見れば、彼らが、コンクールでの勝利云々とはまた別の楽しみ、喜びを見出していることがよく分かる。国語の授業においては、群読がそれに近いもので、作品選びやチーム分け、実施方法などを工夫することにより、大きな効果が期待できる。場合によっては、演劇の専門家の招聘なども考慮されてよい。

文章の読みということで、一つの問題は、読みというものが限定されたただ一つの内容に定められるのかということである。特に文学作品でよく問題になるが、大学入試などで取り上げられた作品の中で、登場人物の気持ちなどを問う問題の答えが、作者自身にも分からないということがある。評論文などで、筆者の主張の核心ということになれば、色々に解釈が分かれるということになると困るし、そうならざるを得ないとする、筆者の書き方に問題があるのだろうか、そうした評論文にしたところで、結論をどういう形で表現するか、表

現の裏にどのようなものを潜ませようとするかは、筆者の個性が現れる所であり、解釈の多様性の余地が生まれる所である。

「もちろん、漱石のほかにも、日本の文学者のなかで、森鷗外や島崎藤村もまたそういう重要な要石であったことを知っている。しかし鷗外や藤村を加えても、漱石は要石の中の要石であったと、わたしには考えられる。」<sup>5)</sup> この文章から、著者の瀬沼茂樹にとって、夏目漱石が誰とも比べることが出来ない、日本近代文学の最高の文学者だということははっきりしている。しかし、では彼が言う「要石」とは何か説明せよと言われると難しいし、答えは必ずしも一つにはならないだろう。また、漱石と比べる二人に鷗外と藤村を挙げるのが妥当かどうか、議論出来るだろう。

こうした読みの多様性を、授業の中で我々はもっと大切にすべきではないか。我々が先人の読みも参考にしながら読み解いた結果を、一つの文章の「正解」としてしまわずに、もっと余裕のある読み、解釈が展開されても良いのではないか。そういう意味で、普通の授業でよくやられる、これはどういう意味か、これを読んでどう考えるかと、ある生徒を指名して発言させ、それを板書してコメントを加えて終わりという場面ばかりでなく、生徒たち自身がお互いの多様な読みを出し合い確認し合う場面を用意すべきではないか。そうすることによって、読みが深まると同時に、授業の深みも増すことになるだろう。ある文章の一節を読み終わった後でグループごとに分かれ、教師が用意した作業シートに従ってその表現の意味を自分なりに読み解き、それをグループ内で交換するのだ。机間巡視をして見て回ると、成程そういう読みもあったかと感心させられるものがいくつも出て来るに違いない。

### 3 書く

読む、聞く、書く、話すという、言語活動の4つの領域のうちで、この書くという行為が、多くの人にとって最も抵抗感の強い活動ではないか。中には書くことが面白くて楽しくて仕方がないという人もあるかもしれないが、大半の人は書くのがしんどいと思うだろう。手紙よりは電話、電話よりはメールの時

代である。文章によって自分の気持ちを伝えることの難しさは多くの人が感じていることであろう。どんな言葉遣いをするのか、どう表現すれば間違いなく自分の気持ちが伝わるのか。ワープロならいいが直筆にすると自身の字の巧拙も気になる。あれこれ考えて書くためには時間も必要だ。

そうした点からすると、書くことを生徒に任せて、自宅学習の課題にするよりは、国語の授業時間に書くチャンスを作ってやるのが大切である。何について書くのか明確な課題を与え、言葉や表現の参考になる事例を示し、時間をたっぷりとってやることによって、書くという行為に対する抵抗を随分低減してやる事が出来る。親に対する感謝の言葉、自分の名前についての思い、自分自身への手紙や震災などの被災者への手紙等。テーマは様々設定することが出来るし、文例を示すことも容易である。そうした書くという時間を授業の中に上手に取り入れることによって、生徒の書くことへの負担感を出来るだけ減らしてやりたい。

読書感想文を書くということはよくやられる手法だが、本学でもやっているように、課題図書を選定し、それをどう読んだかを書かせて添削・批評をするということも重要だ。教師にとっては、生徒が出してきた文章を一々読んで添削をし、コメントを書くということは、非常な労力を必要とし負担にはなるが、それだけの成果はある。

課題図書ということに関してついでに言うと、教師だけではなく、生徒からも推薦図書を募り、〇〇高校の図書100選といった形で小冊子を作り、在学中に何冊は読もうと推奨している学校もある。こうした試みも参考にされてしかるべきだろう。

自宅学習について、少し否定的に書いたが、日記をつけるということも大切なことだ。しかし、私自身が三日坊主を繰り返し、最初の数ページだけ書いた日記帳を何冊も並べているという惨状では、多くを語れないが、生徒諸君に折に触れて勧める努力は必要であろう。

それに対して、毎日の新聞のコラムを張り付け、これに自分なりの感想やコメントを書くという方は、比較的取り組みやすいようだ。市販のノートもある



が、新聞社によっては無償で配布する所もある。時々提出させて見てやることで生徒のモチベーションも上がるし、場合によっては、NIE の実践と絡ませることも可能だろう。

書くということであれば、文章ばかりでなく、詩や短歌、俳句の作成なども視野に入れるべきだろう。こうしたものには、地方や全国規模の、あるいは大学等主催のコンクールが実施されているものも多く、そうしたものに意欲ある生徒に参加させ、それなりの評価を得ることは、大きな励みとなるだろう。

#### 4 話す

日本人の苦手科目は、話すことだと言われる。特に多くの人の前で話することに大きな抵抗を感じる人は多い。赤面恐怖症という言葉もある位だ。また、最近のゲーム流行りの様子を見てみると、友達同士集まっても、それぞれが自分のスマートホンの画面を見るのに夢中で、ほとんど会話がな。自分の考えをきちんと相手にわかるように話す力を身に付けることは、国語教育の重要な課題だが、それを培う条件や環境という意味では、中々厳しい状況と言わざるを得ない。

話すためには、話す中身がなくてはいけないというのは正論ではあるが、中身がなくても、まず話すことも大事である。話す色々な場面を設定し、まず声を出させること、そうすることで抵抗感を減らし、過度の緊張から生徒を解き放って、話せるような段階に連れて行ってやりたいものだ。

テーマを決めたグループ討議がその端緒になろう。読み、書きといったテーマと関連付けて、なぜ自分はこう読んだのか、自分の書いた文章の意味はこうで、狙いはこんな所にあるといったことを、グループの中で話し合いをさせる。こうしたことを、習慣化させると生徒たちが活発に意見を言い合うようになってくる。

聞くところで取り上げたディベートも当然大事な方法だ。最近でも、学年単位でディベート選手権のようなものを実施している学校があるが、国語の時間にとらわれず、他教科とも連携して実施するとより幅も広がるだろう。

そういう意味で言うと、聞くところでも触れたが、職場体験実習や総合的な学習の時間などで実施される、地域に出て行つての聞き取りなども効果的だろう。相手に何かを聞くためには、こちらが事前に何をどう聞くかを明確にし、こちらの意図にあった話を引き出さなくてはならないから、聞くためにはまずきちんと話せることが大切になって来る。実際の場面と相手を想定した模擬練習を行い、複数回の経験を積ませることによって、生徒に格段の成長がみられる。最近の生徒は、ごく小さい気の合った仲間同士での会話に終始する傾向が強いので、違う世界の人や異世代の人と話をする機会を積極的に作る努力が必要だろう。

また、18歳選挙権の絡みで言えば、教育や福祉などのテーマで、私の政策というようなものを書かせ、それをみんなの前で発表させるということも有効かもしれない。模擬投票などが多くの高校で実施されているが、そもそも政策とはどういうものか、それを候補者はどう有権者に訴えているか。生徒は自身が体験することによって、より身近な問題として考えることが出来るだろう。

話す、発声ということに関していうと、部活動の生徒の活躍を考えることも出来る。放送部や演劇部、生徒会関係の生徒に、発声の実際やトレーニング方法、あるいはみんなの前で話す時に気を付けていることや工夫していることなどの生徒自らの体験を、生徒自らの口で語らせることには大きな意味があり、そうした機会を積極的に授業の中に作って行く努力も必要であろう。そして、音声というものは、単に情報伝達の媒介ではなく、それに乗せて感覚的、感情的なものも伝わることを、改めて気付かせたい。同じ朝の挨拶「おはよう」でも、どういう声音、強さ、語調で言うかによって、その人の気分や感情が分かるものである。ちょっとしたことで友達関係がいじめに転換したり、ささいな言葉のやり取りで深い感情の亀裂を生んだりしやすい現代の生徒たちの人間関係のもろさも、こうしたことを再認識させることによって、生徒たちにそれらを軽減する糸口を与えることが出来るかもしれない。

## 5 生徒の意欲をどう引き出すか

最近の生徒の学力や意欲に関する調査で際立って問題視されるのは、中位から下の学力レベルの生徒の学習意欲の極端な低さである<sup>6)</sup>。その要因については様々な理由が考えられ、それらが複合的に絡み合っているものと思われる。単純にこうすれば解決するというものではないだろう。しかし、私が教員になった頃は、生徒の学習意欲が低い場合、「飲みたくない馬を水場に無理に連れて行って、水を飲ませることは不可能だ」ということで済んでいるような所があった。しかし、高校進学率が98%を超えている現在、それでは学校の使命が果たせなくなっている。「飲みたくない馬にどうやって水を飲ませるか」が大きな課題なのである。最近取り上げられるアクティブラーニングの手法なども、その解決策の一つであろう。

我々が第一に考えなければならないのは、知的好奇心、成長への意欲のない生徒はいないということである。何らかの原因で、学習への意欲を失い、すねたような態度を見せる生徒であっても、必ずその底には、分かることの喜びを秘めており、今の自分を何とか変えたいという欲求を持っているものなのである。それが若さの特権なのだ。

では、それに向き合う教師はどうしなければならないのか。まず、教えることに真剣になることである。教材を愛し、心からこれが訴えているものを生徒に伝えたいという真実の熱意が必要である。授業の上手い下手はあり、一種天性のような所もあって、授業の下手さ加減はなかなか改善しないかもしれないが、何とか精一杯の努力の中で、この授業を通じて生徒を伸ばしたいという必死の思いがあれば、それは必ず通じる。

ただ、そうはいっても、何もせずに居直っていても当然生徒には受け入れられない。教材を自分なりに細かく分析し、読み込み、他の参考文献も参照し、解釈をゆるぎないものにすること。そして、それをどう生徒に提示し、自分のものとしてどう考えさせ、どう主体的な学習につなげさせるかという観点で、教材や周辺のことを準備し、授業の構成を工夫することが大切である。

そして、そうした中で重要なことは、「教えることは学ぶことだ」という感

覚を忘れないことである。様々な学習活動を生徒にさせるためには、今述べたような自身の学習も重要であるが、実際の授業の中で生徒に接していると、生徒の様々な反応や考えに、なるほどそうだったのか、そんなこともあるなあと気づかされ、考えさせられることが多々出て来る。それこそが教師の楽しみ喜びであり、授業の醍醐味なのである。

それと、最初に言ったことと関連して、今学習指導要領上は国語と言われているが、国語も世界の言語の一つとしての日本語だということである。そうした観点で、現在の国語及び国語教育を見直していくと、いくつかの問題点に気が付くに違いない。たとえば、主語の曖昧さ、結論の不分明さは、日本文化の特徴と言ってしまうまでもだが、国際社会の中でのコミュニケーションツールとしては通用しない。また、同音異義語が多いのも特徴だが、外国人の理解を得る場合には障害となる。我々の表現が国際社会にも通用するものになろうと考えるなら、国語の授業でも、主語をはっきりとさせ、言いたいことを早目に的確に提示する書き、話す指導というものを考えなくてはならないだろう。全世界に多く存在する言語の一つとして、それらと共通の基盤を有する言語表現としての国語という教科の指導法の再構築が必要であろう。

また、授業の手段・方法に関して、ユニバーサルデザインの考え方を積極的に取り入れることも必要だろう。普通学級に在籍している子供のなかにも様々な障害を持っている子供がおり、そうした子供が、教師の指示や言っている内容を的確に把握し理解するためには、字の大きさや提示の方法など、こちらが考え工夫してやるべきことが多い。そしてそれは、多くのユニバーサルデザインと呼ばれるものがそうであるように、決して障害がある子供のためばかりでなく、障害のない子供たちや海外からやってきて、日本語が自由に操れない、その理解に困難を感じている子供たちにとっても有用なのである。

## おわりに

国語でなく日本語だろうという議論が始まってから随分になるが、いまだ国語が日本語に切り替わるといった雰囲気は見られない。しかし、社会は着実に

変化しており、我々が国語という時間の中で相手にしている生徒達は、その社会の中で生きて行かなくてはならないのである。そうした生徒たちにより良い人間関係を築き、より豊かな明るい人生を歩んでもらうために、どのような力が必要とされているのかを、我々教師は不断の研修の中での的確に把握し、それを授業という実践の場で、着実に生徒に力として付けていかななくてはならない。それは多岐にわたり、ひょっとすると今までの考え方やり方を覆すものとなるかも知れないが、そこにこそ、教師のやり甲斐、授業の面白みがあるのであり、日々の研鑽を積みながら仲間との共同した取り組みの中で着実な成果を収めて行かなくてはならない。

#### 注

- 1) 文部科学省が行っている「日本語指導が必要な児童生徒の受け入れ状況等に関する調査（平成24年度）」によれば、小学校で17,154人、中学校で7,558人、高等学校で2,137人の児童生徒に日本語指導が必要とされ、在籍する学校数で言うと、小学校3,489校、中学校1,844校、高等学校375校という結果である。これは、全学校数の小学校で16.3%、中学校で17.2%、高等学校で7.5%という割合になる。
- 2) 『最後の一句』 森鷗外
- 3) 『ディベートをどう指導するか』 吉田和志著、明治図書出版1995年
- 4) 『合唱・群読・集団遊び』 家本芳郎著、高文研1979年
- 5) 『夏目漱石』 瀬沼茂樹、東京大学出版会1970年
- 6) 『第2回子ども生活実態基本調査報告書』 ベネッセ教育総合研究所、2009年。同じベネッセの行った第5回学習基本調査（2015年）では、授業以外の学習時間が急速に増え回復していることが述べられているが、家庭間格差や、学習が子供たちの自律的・能動的学習になっているかどうかの問題点等が指摘されており、学校現場での注意深い検証が必要であろう。